



# 蘇岐林

## 目次

### ▲論説

禁煙に就て  
社會に出てから  
寸感録

日記の終りに  
歳首隨筆

林業家として  
鮮せんとする諸  
君に

### ▲文苑

和歌  
俳句

### ▲通信

蘇門會便り(福  
嶋、長野)  
蘇峽會便り

### ▲雜報

(明治二十四年七月十日)  
第三種郵便物認可

(毎月廿五日刊行)

第七拾五號

大正五年一月二十五日

## 論説

### 禁煙に付ての所感

半 二 生

元旦の誓ひ……大正五年元旦より断然禁煙することを八百萬の神と諸君の前に誓約する、若し此誓約に違反することあるときは如何なる罰則を蒙むるも元より辞する所でない……是れは僕が昨年末偶然の自覺により大なる確信を得て本年の正月元旦を期し断然禁煙することを決心すると共に神と友人の前に於て眞面目に誓約した所の言葉である

七八年前より幾回となく禁煙を企てながら毎度失敗に終て自ら薄志弱行を證明した僕は今度も亦例により例の通りならんと一笑に付せらるるは誠に止むを得ない所であるが、然し今度と云ふ今度は確固する信念を有し又必ず成功すべき方法を以て實行し神と友人の前に誓約までもしたのであるから從來の様な氣狂れにやつた禁煙とは大に其根底を異にして居る、現に禁煙を断行して今日迄僅かに二十餘日であるが既に喫煙の念は全く消失して確に成功の光明を認むることが出来たのである

奉職した當時最も閉口したのは宴會と先輩や上長者の自宅を訪問した時である、其頃迄は酒も煙草も全く用ひないし又代數や測量法の話ならば兎も角面白い世間話し杯は無論出来様筈もなく、左ればとて借りて来た猫の様に座敷の隅につてねんと無言の行をやるのは尙更以て閉口の至りであるかを種種工夫の結果……後日に至り此の苦痛に幾倍する大苦痛を招く原因となるとは神ならぬ身の知る筈もなく……遂に此苦痛を除くべき一時の手段として始めたのが喫煙である

手段と目的が轉倒する……ところが世間に能く在る例だが初めの内は社交のためとか或は營業上の取引きを爲すためとか立派な目的に對する一時の手段としてやつたことが何時ともなしに轉倒して手段が目的となり夫れがために遂に一生を誤るものさへあるが、僕の喫煙が矢張其初めは宴會や訪問の時に於ける所謂てれかくしの手段として用ひたのが何時の間にか自ら進んで喫煙を爲す様になり、夫れが年一年と進んで後には殆んど寸時も煙草を離すことが出来なくなつて最も盛な頃には大天狗と云ふ五十本入の大巻煙草を毎日二袋も用ひ一ヶ月の煙草代が五圓以上に及んだことさへある

斯様に喫煙が盛んになつて來ると啻に經濟上の損失計りだけでなくニコチンの中毒で腸胃や腦の具合が悪くなり心臓にも大に異狀を

來した様であるし又一時間以上も喫煙を止めて居れば茫然として知覺神經が麻痺した様に感して来る極端に云へば殆んど寸時と雖も煙草を離すことが出来ないう随て其害も益々多くなる。斯様に喫煙の害毒を受け夫が爲に多大の苦痛を爲すに至つたのは唯最初に目的の善良と云ふことのみに注意して深く其手段の善悪を選定しなかつた不用意に基づくので、初めて夫れと心付たときは最早容易に脱することが出来ないう様になつて居た。

禁煙の失敗……初めて禁煙を企てたのは今から七八年前のことである、愈々本日より禁煙すると決心してから四五日間強て喫煙を全廢した所忽ち神經衰弱を起して讀書は勿論普通の手紙さへ認むることが出来なくなつたので止むを得ず、節煙と云ふことに改め大に其量を減じて用ゆることにしたが之が大失敗の原因となつた即ち初めに禁煙を爲す時には随分強い意志を以て決心し喫煙の慾望を強て厭へ付けて居たのであるが多少の事由はあつたにせよ禁煙を節煙に改めた爲に心に油斷を興へ所謂心に隙間が出来たので忽ち慾念の乘する所となり次第に決心が破れて再び元の通りに喫煙する様になつた。

子をポケットに入れて置き煙草代りに用ひた所勿驚毎日半斤餘のビスケットを要するるので却て喫煙以上の損であるのみならず神經衰弱は前回同様になり加るに胃弱さへ發し僅かに二週間程で再び失敗した。然し其後に於ても益々禁煙の必要を感じ度々禁煙を企て煙草の代りに仁丹を用ひ或はハツカイブを用ひ或は又友人に或條件を具して禁煙を約束したことさへあるが何時も神經衰弱を起して止むを得ず失敗を餘儀なくせられたのである。

今日の禁煙と所感……以上失敗の原因を鑑みて今回は大勇猛心を以て斷然禁煙し如何なる神經衰弱を發するとも斷つて再び喫煙せずと決心し且つ何等煙草の代用品を用ひぬこととし又如何なる事由ありとも斷じて此決心を齎すことのない様に神と友人の前に誓約したのである、然る所意志の力程不可思議なものはない、斯様に大勇猛心を以て斷乎たる決心を爲し禁煙を斷行した所が之れ迄毎度失敗の直接原因となつて居た神經衰弱も全く發せず又禁煙を誓つた當日から喫煙の慾念が全く絶つて今日では喫煙と云ふことは遠い昔しの思ひ出での種であるが様な感じがするだけである。

社會に出るから

飯 沼 生

在校生諸君！ 私がスクールライフを終へ、社會に出ま

してから早や八ヶ月になります。實に光陰は矢の如しです。もう十日で此の記念すべき大正四年も暮れるのです。……其の間私の生活と思想には大なる變化がありました。左に今迄研究(其幾分はセコンド、ハンド、ナレツヂなるは免れませぬ)したる社會生活真相の一端と之れに對する私の考へを述べんとするのですが、諸君が此の文を眞となすや否やは問はず又之れを問はんとも思はざるも唯々新しく社會に出る諸君の他山の石たり得ば望外の幸です。

社會……是程吾々に密接で而も迂遠に見ゆるものはありません、其は吾々に自然必然な先天の唯一絶対なるものとして向つて居るからです。吾々は生れるや否や社會生活に入らねばなりません、自我の社會生活の拋棄(自我拋棄)は自我の滅亡である。吾々は滅亡したくはないといつて不満な社會に喘ぎ乍ら徹頭徹尾悲しみに満ちて生活し行きたくは無、其所に何等かの光明を認め擡頭して進める限り進むのが吾々人間の自然の道ではないでせうか、現代社會の生活は主觀が客觀に支配されてゐる様に思はれます。即ち大切な事物の價值判斷も主觀の純眞な流露發現よりは寧ろ反對の客觀から大なる影響を受けて居る。經濟學上では價值は主觀的なりと云ふが、私は是も確固たる大真則ではないと思ふ。

個人的な唯我的な孤獨の自我の認識價值が果して正しいか、多數な相對的な社會の認識價值(單なる客觀價值)が眞正であるか薄學非才の私には到底解らなう。『世界は自我の表象なり』と大哲シヨウペンハウエルは叫んだ、自我の認識は自我の世界である、自己の眞情は自己以外何人も知悉する事を得ない。自我は尊い主觀は大切である。然し乍ら人は絶対に本能的性格からはなれて孤獨の生活を實行する事は不可能である。

吾々は必然に共同生活を營まなければならぬ、殊に經濟生活に於ては尙更であると思ふ。米國ワルデンの哲人トロー氏ならば必ず此の説を非とするならんも)而して一種の論理的矛盾は人間が乾度行つて居るのであると私は信ずる。現代社會は取もなほさず現實である、理想でも夢幻でもない、だから種々の悲惨な出來事が起つて來るのだ。そこで現代人は確かに惱の中に在る即ち生活の眞在を掴む爲に慮焦たり藻掻いたり懊惱して居る。然して此の惱む事は生活の眞底に行進する道程であつて外面的に其の姿は見憎くとも自己の生命を伸張する姿の實際なのだから如何ともする事が出來ない。

過去の國民も個人もは宗教にも道德にも政治、經濟、教育、哲學等にも皆默從した、實際生活は不徹底な隱忍であつて聰明を欠いてゐたのです。是れが近代(凡そ佛蘭西革命から現代に至る一世紀の間を指すもので此の間に思想界に大變動が起つた其の主なるは物質的、科學的、個人的、主我的、厭世的、懷疑的等が其の特徴である)生活に入つて著しく聰明の必要を感じ、實際生活の總てに對して批判と反省が加はつた。斯くして從來の「盲從」の生活は意義を失ふと共に自己の生活を批判し反省しつゝ進むに伴れて、生活に懷疑は伴つた、懷疑より進歩して眞に入りたい、と希ふのが現代人の懊惱である。

自己生活の批判換言すれば自己の内省は懷疑より懷疑へ向ふのが當然の順路であつてよりよき聰明を以て生活意義を見出す時其所には悦樂と歡喜がある。此の眞在を掴み得てこそ始めて現代生活の眞意義に觸れる事が出來よう。現代人は此の領域に進まんとするのストラuggleであり惱である。冷静に是を思へば此の「惱み」は實に貴い惱めであるまいか、自己に對する惱の忘れられたる時は最早や向上も躍進もなく退歩と頽廢の時でなければならぬ。茲に於て吾々の如きアドレッセンスにある者は新しく若くなければいけないと思ふ若いと云ふ事は強烈にして殆んど抑制し切

れない生命力に溢れて居ると云ふ事である  
永遠に燃して燃わて居る熱い血潮の  
奔流する程人間生活を有意義にし有價値に  
するものはなからう。

「林友誌」寸感録  
△近來「林友誌」に付き其内容の貧弱を訴へ  
る者や角ウゴン呻りする輩が、内外の會員に  
あつて、仲には随分極端な論者がある。と  
は嘗て由縁加藤君が假面を脱しての告白で  
あつた。がこれはゴン呻り位に非ずして  
其火焔の餘程以前より擴がつてゐることは  
迂史の敢て疑はぬところである。

火點ではあるまいか。  
△さあれ吾人は絶對的に其れ等詩歌を排斥  
するものに非ず、只しかく至れる歷程を恨  
む耳。  
△凡そ「得隴望蜀」の情は之人類、精神界の  
常夜燈とも謂いつべきものである。然し之  
が満足て、彼岸に到達するは仲々容易で  
ない。けれども、努力の如何によつてはか  
なり満足の地點迄は漕ぎ得らるゝものと思  
ふ。

等の裨益云ふも更又諸君相互の利益も決し  
て少くはないであらう。  
△徒に秃筆云々をかこつ事なくどしどし發  
表せられよ。しかくせば吾人が理想の域に  
進むことが出来るのである。  
△前號に於て綠山とか言へる人が御大典紀  
念事業として、之が改造論を唱へられてあ  
つたが同氏の説は主として形式的方面のみ  
であつて其内容には言及せられず反つて現  
狀満足主義を採られたのは迂人には聊か物  
たら無かつた。

日記の終りに  
華 村  
月日は流るる水の如し、光陰は矢の如しな  
ど言ふ名句が痛切に我が脳裡を刺戟する大  
正四年の最後の門に立つて私は次の様に叫  
ぶのである。  
「大典舉行と言ふ印象の深い本年の反面に  
は焦慮と、亂奏と、苦悶と、悲鳴と、それ  
等の鋭さが伴ふてゐたが其等の鋭さは過去  
として永劫に葬り去り御大禮と言ふ盛儀は

永く永くメンタルホトグラフとして心の底  
に止めをうして去つて大なるホープを以て  
新しい靈的生活の第一歩に入れし滿腔の喜  
悦を以て」と  
日記の第一頁に筆をかけたのは昨日の様に  
思はれるのに最も今年も暮れてしまつた然  
しもうした短い一年も淡い記憶を辿つたな  
らば幾多の喜悅と苦悶とが滾々として泉の  
様に湧き出るのである。  
百花爛漫として咲き黃鳥花梢に囀りて自然  
ながらの音楽を奏する野山に互に思想や主  
義のあふた友と杖を曳いた春のシーズンも  
終る頃あの關西の地に半月を費して旅行し  
たのも吾が若いハートに忘れ得ぬ印象を止  
めたのであつた又炎熱焼くが如き眞夏の日  
を涼しい森林の氣の漲つてゐる御料林にさ  
けて吾が愛する一巻の書に讀み耽つたのも  
或は龍田姫の繻すらん裳のうれしと思は  
るる秋の山々に瑠璃色の空より落ちて來る  
小鳥の聲を聞きながら逍遙したのも皆一時  
の幻夢であつたれ等はずべて喜悅に満ち  
たうして心よいエモーションを味ふた過  
去であつた。最う後三月ばかりで木曾を去  
る私にはこうしたムードを永遠に傳へたい  
ものである今でもそうしたムードを幾分  
も心の中に生じた時は憧憬の心持ちになる  
ことが度々ある。  
然し自分はこうした様な楽しい道のみを歩  
んだのではなかつた其過去反面には言ひ知

歳首隨筆

岐 蘇 仙 人

○思ひ出多き大正四年も寺の小僧の突き  
出す除夜の鐘に撞崩されて……最後の百  
八つ目が餘音長く萬年の別れを惜む時夜は  
ほの／＼と明くれば門の松翠に注連に棚曳  
く初霞追羽子の音に獅子舞の太鼓に新しい  
春の瑞氣は都ならねど蘇峽の到る處にもみ  
ち充ちてゐる。  
○賀客是れより廻禮に多忙朝以て夕に至  
り遂に夜に入り二日又三日と飲み廻り喰ひ  
廻るなるべし。  
○飲むは善し然れども飲み過ぎて沈酔し

果ては途上の人に衝き當る酩酊者と深醉漢との衝突は端なく茲に一場の喧嘩を演出し揚句は警官の手を煩はすとは新年早々餘り芽出たきことにあらず。

○喰ふも善し然れどもたいさへ雑煮腹の消化充分ならざるに食過ぎて遂に胃病を惹起し數醫者を多忙ならしめ胃活の値上げを來すなどは醫者賣藥商ならざるものゝ喜ぶべきことに非ず。

○將にこれより各種の新年會は開かれん政治家も官吏も貴顯も貴婦人も紳士も紳商も教育家も學生も皆うれしく新年會を催すならむ。

○而して此輩何をか談ト何をか謀る只りれ一片の虚禮として徒に飲食會に了るにあらずんば幸甚とす。

○吾人は怪む人は新年を悦びながら徒に舊習舊慣に拘泥して何等の新たなる氣概なき事を

○新年と言ふのは來年からは新らしい人に改まらうと云ふ人の心の新しさを示すに於て意味がある故に年の改まるにつれて心をも新たにしなければ新年は何の價値もない新年は依然として舊年でなる。

○新年は無理に之に意味を附するに依て初めて新年となるのであつて我等は三百六十五日毎日々々新年を迎へて居るのである否時々刻々新年を迎へて居るのである。○然るに一夜明ければ變る世や俗界の衆

生は年禮なりと稱して羽織袴に表面をつくらひ苦しい顔も無理に地藏顔「た目出たう」

○オメデタウのめは目と芽と何れを書くべきか又オメデウとは何の意味か其の義解に苦むものである(諸賢の御教示を乞ふ)

○何がた目出度い? 家々を駆けまはつて酒の振舞にヒヨロ／＼とよめなきながら猿のような赤い顔のしまりなく熟柿臭き息をふきかけて他人の迷惑を顧みず大道狭しと歩いて居るのは何たる様である!

○朝日は初日とありがたがり、夢は初夢と喜び、鶏は初啼きと壽き、贈物は年玉と稱し、餅は雑煮と舌つづみうち、酒は屠蘇なりと汲み、歌は謠なりと云つて無暗と陽氣に騒ぎ、濁水も若水と呼んで矢鱈と湯を沸し顔を洗つて若くなる積りか知らぬが斯くする毎に……を知らぬ輩もオメデタウ哉。

○年はまた改つた而して改まつたと云ふ事其事が吾々に既に何かしら新しい希望を懐かしめる。

○吁世人は此清新壯活にして高潔なる新年に際してなほ且つ舊臘の濁濁を憶ひ濁れる精神を把持して其清淨高尚なる光明を認むるなく只るれ古き迷裡より更に新らしき闇黒裡に移れるのみ。

○うれ一日の計は之を曉に定め一年の計

て居られる方はありはせんかと僕はつまらない心配をせずには居られないのであるこは無理ならん事では善は急げとか古人の金言もある様にこれは仲々よい考へであるが急ぐ道は廻れどか又せいては事をし損ずると云ふ諺もあるから眞の成功を期せんとする者は暫く静止してせめて本論の終結を告げる迄で見合されたならば必ず成功すると

も失敗だけは免がれるであらう。扱て第一に諸君に話して置かなければならぬのは結婚問題である此ればかりは今日と云ふてすぐ間に合ふものでないから前以て準備して置く必要はあろう荷造りなどは早々急ぐ必要はない僕はなせ結婚問題を真先に出したかと云ふと如何に諸君は朝鮮へ行つて一生懸命に働いた所で内務大臣の家政が悪かつたならば何の役に立たぬれ

こり失敗の失敗の大失敗であるしまひには何の罪もない僕までを恨まねばならぬ様な哀な境遇に陥るかも知れんなせ内務大臣は郷里に限つて朝鮮は面白くないかと云ふと僕は直ちに返答に困るのであるが此れに付いては仲々面白い話もあれば又種々な原因もある試みに諸君は此の問題に付いて自問自答して見給へ結果は何れに歸するであらうか中には目前の小利に迷ふて一人で行けば幾分か旅費の節約になるなどつまらない考を起す人も中にはあるであらうか

人は特に僕の云ふ所を記憶して置かなければならぬ。

は之を歳首に定むるは用心あるものゝ覺悟ならずや。

○然り歳首將來の希望を告げ進んで精進せんと思はるは識者なり愚夫愚婦は何等の考慮もせぬものなり。

○鶴龜の童話に幼心は如何に動かししか? 反省せよ! 猛省せよ! 卯の眠りは過ぎて今や辰年に入りし龍は雄飛のシムホルである

○これを要するに新年は食ふ爲め酔ふ爲め遊ぶ爲め喜ぶ爲め泣く爲等に來るものにあらずして人の心を新たにすべく來る也。

○吾人不肖と雖も歳と共にホープを新にし筆硯を新にし一陽來復の感あるを幸とす茲に謹んで御即位第一の新春を祝し奉る

と共に我親愛なる校友會員諸君の御健康を祈る。(大正丙辰年一月二日)

林業家として渡鮮せん とする諸君に (三) 星加正雄

謹んで新年を賀し併せて林友の發展を祈る愈々記念すべき大正四年も早や過去なとつて世は大正五年となつた諸君大いに努力し給へ僕も一層奮發して茲に引續き渡鮮論を講じ様と思ふのであるが近來學者の説によると現代の青年は非常に氣が早いと云ふ事であるそれで有志諸君の中にははる程朝鮮は有望であれば一日も早く朝鮮へ行つた方がよからうと云ふので早や荷造りなどをし

御所を拜観して 限なく奥ゆかしくも見ゆるかなすめたほぎみの大宮どころ

ゆるされて雲井の庭にたてるまはやつこもしばし雲の上人 北野神社に詣で

友ごちと共に北野の神まうで身の幸いのるけふかうれしき 奈良市にて

そのかみをおもひ出で、もしのぶかな奈良のみやこの跡をたづねて 鳥羽港にて

うらゝかに晴れ渡りけり日和山ながめも深し鳥羽の海原 數々の島山みえてとばの海とはにゆかしきところなりけり

冬木立 喜多村比呂志

つれづれに書齋の窓をひらきては 風の來てなる冬木立見る 見渡せば北風荒ぶ冬の野に

淋しく立てる冬木立かな 寒月の淡きひかりに影もなく、 こぶしの如き冬木立立つたへがだき心にひざり窓により

文苑

和歌

寄國祝

竹 軒 生

まがつびのあらぶる四方の國中にたうらやすの國のぞけき

天照神のみするのたてりめし國のみはしらゆるぐ世もなし

海にくがにひろごりゆきてあしはらの國の榮がはてなかりける

旅のつと

安井正夫

若水くめば初からず鳴く  
しどくと雪の降る夜は何とはく  
幼き折の思ひ出さるゝ  
あの男太き聲して君が代を  
歌ふと笑ひし折のなつかし  
降雪りの大雪降りぬかく云ひて  
君戸あくれれば朝日影さす

滞郷雜詠

拓植華村

小ランプの油はちいと音たてて  
寒き書齋の夜は深みゆく  
あたたかき母のみ胸に抱かれて  
ねて見まほしや胡蝶の夢を  
薄紅の山茶花うつる池の面に  
しぶき立てつつをし鳥おどる

此頃の書齋は樂し今日も亦  
白砂集の上に日は暮れにけり  
はしたなき小説讀みて涙しぬ

心淋しきこのごろの吾れ  
うぶすなの宮にわがうつ拍手の  
森々ひびきて神々しけれ

横井正風

ぐつたりと年を忘れぬ新らしき  
春のめざめのこゝろよきかな

冬八句

芳舟

長城に驢馬のさげびや冬の月  
狂人のとなりに住むや冬の月

冬の月木を割る寺のをとこ哉  
其の男の脊のたかさや冬木立  
霜やけの手より勝栗こぼし覺  
貧すれどむかしをしのお寒椿  
地蔵皆あちら向いたり冬の風  
稀に見る暖さにて  
元日や南國の冬も思はれて

春五句

正

風

新らしき領土に吹くや春の風  
初風や曲浦の松に鶴なきて  
雪野十里残んの月に初鳥  
紙鷲かつぐ我子に嬉し初日影  
初鷄や伊勢へ出舟の舟子の歌  
寒月や狼吠ゆる山の上

通信

學校及校友會便り

○終業式 十二月廿一日例に依て校内の大掃除を行ひ終て講堂に於て終業式を擧げ七宮校長の訓辭ありて閉式生徒は即日より歸省の途に上り  
○始業式 一月廿一日殆ど三旬に彌る長期の休暇終へて一同再び一堂に會するを得たり校長は當日年頭に於ける所感を述べ吾等の方に力むべき處を懇々説示せられたり  
○寒稽古 校友會擊劍部に於ては一月廿二

福島に於ける蘇門會

松樹庵

蘇門會の記を書く前に私は逝ける友下畑君の後を書かねばならぬのであるが、去年の九月から馴れない印刷業を始めたので心には懸り乍らも途延々にして居るのです、下畑君の生家からは材料も拜借しなりで居て何とも申譯ないと思つてゐるが他の事情の下に書かないのではない事を御注意下さつた方々に御断りして置きます。  
去る一月九日恒例の蘇門會を催した、豫想した程の盛況ではなかつたが校長先生始め多數御出席下さつた先生方と遠路を繰り合はして御出席下さつた同窓諸君には發起者一同多大の喜悅を以て御禮申上る次第です。

卒業生は毎年二三十人宛増加するが此會の出席者は仲々増加しない、本會に許り居ない爲でもあるが中には内々福島に出た時

は大に發展する事があつても當日は遠くもない所を祝電位で澄して新しい妻君へ忠勤振りを見せると云ふ様な人も出来たので人數で振はないのは致し方がない。

併し乍ら内容は例の通り香氣で賑かで、福引あり一人一藝あり、垣を取り底を抜いての會合で見晴の二階を震かして各自充分満足して散會する事を得たのは何より嬉しい、蘇門會と云へば如何にも氣樂な、隔意のない例へば親子兄弟の會合であるかの様な感直に連想する事が吾々の矜とする所で従て一年中の脱線を茲に爆發させる事が多いが其が或一部の人々の反感を買つて居はすまいかとの懸念もないではない、けれども共徒らに多數を集めると云ふ事が親和の念を強からしむるものと思はれないからさうした氣分を以て集合する同窓と母校の先生方があれば此會は充分有意義なものではあるまいか。

今年の蘇門會を終へた後で一考へた事は陳套と云ふ氣分である、來年は一層趣向をこらして變裝競争でもやつたら如何なものだらうなど茶目た事も思付て居るが諸君の御賛成を得る事が困難であるかと思ふ、奇藝、珍藝の百出した一人一藝や滑稽、皮肉の連發であつた福引の内容等一々紹介申上ぐべきではあるが發起人から大分脱線して居つた結果、頗る朦朧として居るので畧して次に出席せられた諸君の姓名を揚げ

て擲筆するとしよう。

七宮校長、北村先生、西澤先生、宮川先生、福山先生、松原囑託、加藤書記、征矢野記者  
野知里慶助君、乘山久雄君、高柴真次郎君、長谷川義雄君、小池新吾君、松本純平君、宮下信一君、狩戸深一君、宮田實君、小林恭一君、木村晋次郎君、水野忠一君、肥田幸一郎君、吉村金次郎君、及川崎本雄

毎年生彩を添へる市川潔君都合悪しく出席し得ざりしと内藤先生御都合悪しく臨時に缺席せられたるは遺憾とする所である。

蘇門會便り

(於長野市開催)

大樹 小人 投

大正四年は去れり千載に傳ふべき御大典記念を載せて、近世日本貿易史の記録破りの輸出大超過正貨夥多の事實を載せて、其他政界に財界に、幾多聳耳の事實を載せて去れり吾人は此記念多き光輝ある四年を送るや直に茲に新に生氣ある多望なる新年を迎へ衷心より慶賀に堪はず然も彼雲を起し風を生ト雨を呼ぶ活動の象徴たる辰の歳なり而して内外益多事ならんとす、活氣に生きた熱血漲る吾等青年勇躍禁する能はず元旦早々活躍の壯圖を確立せり當此時契りも深き蘇門之同窓相會宴し其首途を祝すると共に交情を温めんとて一月六日をトし其名も相

- 應しき敷料理店に一夕の盛筵を張りたり會する者名譽會員安藤林務課長七宮校長を始めとし二名の實業家十五名の腰辨計十九名舊慣打破の先鋒たる、吾等亦新趣向なかるべき先づ憲法を發布せり。
- 第一條 會衆ノ總テハ平等タルベキ事
  - 第二條 開會中總テノ動作無禮講タルベキコト
  - 第三條 大ニ談ヲ大ニ酌ミ大ニ唄ヒ大ニ踊ルベキコト
  - 第四條 少クモ半生涯ノ間忘ル能ハザル大騒ギヲナスコト
  - 第五條 蕎麥ヲ食フ迄ハ歸ラザルコト
- 次に抽籤を以て座席を定めたり蓋し番號に非ずして現代各士(?)の名を以てせられたり。
- |          |            |            |
|----------|------------|------------|
| 席名       | 氏名         | 氏名         |
| 大酒家      | 松澤 莊太郎君    | 松澤 莊太郎君    |
| 天勝       | 高 樋 博君     | 高 樋 博君     |
| 苗木商人     | 服部 啓治郎君    | 服部 啓治郎君    |
| 大浦カキタケ   | 仲 俣 伍 市君   | 仲 俣 伍 市君   |
| 大ヤマ大将    | 黒 崎 洋 治君   | 黒 崎 洋 治君   |
| 須磨子      | 渡 邊 知 則君   | 渡 邊 知 則君   |
| 炭焼爺      | 安藤 林務課長殿   | 安藤 林務課長殿   |
| 藝者タキ子    | 平 田 稻 雄君   | 平 田 稻 雄君   |
| 電車の車掌    | 七 宮 校 長殿   | 七 宮 校 長殿   |
| ソウリ大臣ノ女房 | 篠 原 昇 士君   | 篠 原 昇 士君   |
| 蕎麥屋の主人   | 久 保 田 吾 郎君 | 久 保 田 吾 郎君 |
|          | 但 馬 廣 造君   | 但 馬 廣 造君   |

居酒屋の番頭 脇田義正君  
發展家 白井辰雄君  
半玉 小池一郎君  
山林局長 池田治君  
金井澄水君  
中島信敏君  
關琴義君

最後の三君は遅れて來會せられたる爲不明なりき、席定まるや高榎幹事の挨拶ありて宴に移りぬ間もなく座興として服部苗木商の指名により本名と席名とを名乗りあげたなり先づ松澤大酒家の怪抱負より始まり各員得意の怪辯を振はれ或は抱負せしめ或は煙に捲かして大に興趣を添へり内に振ひしは炭焼爺安藤課長と詰襟眼の七宮校長の車掌氣焔なりき亦小池一郎君の半玉とは恐入つたる半玉殿なり池田君の山林局長飯に困つたら何日でも來いとの大氣焔に一本參つたり、次に開宴前集め置きたる一人一句集の披露あり次の如し  
一堂の集まる 書生國寶 高榎會山  
時を經し冬の高嶺の孤つ松 黒崎巫山  
澄みたる月にうつる木影よ  
初春に蘇門會場 風薫る 松澤無名子  
會山の風蘇峽の水や音高し 同人  
短かしの思ふ夜永や蘇門會 小池  
我座には藝者なしとて嘆嘆 久保田洋舟  
隣りの三味を只で聞くなり

蘇門會敷の中にも龍が居る 七宮御嶽天狗  
待ち遠し敷へ〜と来て見れば  
同じ窓の今宵うれしき  
仲俣高社山人

花ないが春が來たぞ。座敷 池田  
野に山に瑞氣もたつ年の始め  
龍巻き騒ぐ敷の廣間に 珍竹山人  
温たかや松の集。木會式で 脇田吞氣  
若菜賣。山家親爺や手。太み 平田如山  
粹人の粹を集めし蘇門會 白井  
唐崎の松は僕より偉と思ふ  
一粒の種子、生えし名所松 タジマ  
辰の歳ちや、鎌首たてて  
呑むで火の様な氣を吐かしやんせ  
はらからの團樂嬉し今宵哉 服部大樹  
いろは 關 金井柿山人  
怪氣焔に一句集に興は愈深く酒は亦泉の如し吞む事可なり歌ふもよし且亦踊らざるべからずとて活氣縱横痛飲淋漓放談高唱せり要するに憲法を遵奉して悖らず龍神が江水を吸ふが如く吞み、猛虎の山月に吼ゆるが如く唄ひ、獸王花に狂ふが如くに亂舞せり雖然一片の虚飾なく濁濁を混せず真情を流露せる事とて豪快限りなし亦吾等の前途を

有之翌朝一寸赤面の体には有之候  
▲中にも前田君の新馬鹿大將小羽根君の木會節市岡君上田君佐藤君の木會踊原田君の日光節中島君の秋山節等に至りては御手のものに有之能なし猿共は目の玉をデングリ返し申候  
七宮校長の御得意アイヌの歌も拜聴致し候  
▲其他にも種々藝當が演せられし様に候も筆者も少々酩酊致し候と治安に妨害有之らし候間此位にて筆を止め申候  
▲翌日紀念の撮影致し午前十一時發の列車にて七宮校長御歸り相成候  
▲最後に曾て本會に籍を置かれし矢島、脇田、宮崎、宮川の諸君の健康と御發展を祈り申候本會々則等も決議致し有之候も何れ稿を改め申上候(二月十五日記)  
附記早速御報知申べく候所筆者の會の翌日より臥せり居り候爲め延引致し候事御わび申上候(佐伊塔)

雜報

會員消息

○戸田續君 は先般林區署を辭し目下郷里岡山縣真庭郡富原村に歸省實業に従事しつゝある由  
○東原智君 は本年より秋田大林區署に勤務被命の由  
○關琴義君 昨年未長野小林區署に入りた

るが今回三ヶ月間講習の爲東京大林區署に赴けり

住友家を退身する記 綠山坊  
明治四十年春四月恩師松田先生の薦によりを住友家に奉じてより春風秋雨茲に九星霜、木石に伍し雲煙に交る、此度家事上の都合により退身し郷國三河に歸る嗚呼余が前途果して雲か雨か一月廿日 三河旭の里にて

○訂正、前々號、廣嶋縣西條小林區署に赴任せしを代田君とせるは千村万藏君の誤に付訂正す

謹賀新年  
大正五年 長野縣立木會山林學校  
一月 同校友會

謹賀新年  
大正五年二月 安藤時雄

母校並びに校友會宛年始狀を賜はりたる各位に對し芳名を左に列記し御禮に代へ申候  
(●印あるは校友會と母校と二重に賀を寄せられし分也)  
●安藤時雄殿、松田力熊殿、林重郎殿、安井嘉一君、原潔君、原貴一君、今井健治君、原喜四三君、吉澤英雄君、多田慶次郎君、岡山益善君、吉田佐十郎君、野村光智君

祝するに餘りありき興愈盡きずと雖夜は更けたり亦來む年を期し活動を約して一碗のうばを名残りに惜しくも閉會せり時に午後十一時半なりき。  
擱筆するに際し來會者各位の雅量を謝し併せて健闘を祈る尙他地方に開會せられし各會の御詳報を乞ふ(文責在小人)

蘇峽會通り

▲新年の御慶目出度申納候、會員一同幸無事馬輪相加へ申候間御放念下され度候  
長野木會の兩蘇門會の諸兄四國の會友會の諸君如何益々御發展の事と母校の爲め御祝申候  
蘇峽會も昨年宮川、中嶋、原田の三君の努力空しからず益々發展の域に入り申候手前味増には無之候  
▲本年は辰年に因み尙一層の發展を期すべく新年早々第五回例會と新年宴會とを兼ね開催致し候、幸七宮校長萬障繰合御出席下され會員の満足此事に有之候  
▲一月八日午後六時着の列車にて七宮校長御光來相成早速會場八百竹に迎へ原田幹事の歡迎の辭有之、七宮校長よりの御挨拶有之候て宴會にうつり申候  
▲所謂親子水入らずの會合とも申すべく酒三行にして全く無禮講と相成り随分突飛な言動も有之全く無禮講も無禮講無禮講の三乗位に相成り七宮校長を驚かし申候事多々

樋口徳一君、伊藤益雄君、篠原忠治君、嶽野利雄君、小藤作四郎君、梅田吉郎君、今井安男君、西尾嘉一君、清澤己未衛君、松川文吉君、木下稗藏君、福田友次郎君、柳澤止之進君、鷺澤忠治君、今井眞二君、佐藤一郎君、原耕民君、伊藤昇次君、竹原久治君、高野薰見君、種倉隨藏君、杉本貢君、細江七兵衛君、木村康明君、遠藤治一郎君、宮崎二明君、上條嘉一郎君、千村吉雄君、大久保五成君、松澤敏雄君、甲田林君、等々力官一君、石會根四郎君、征矢朴郎君、飯沼要人君、原田洋平君、松館京太郎君、久保照人君、神作四郎君、柳澤邦治君、小林秀一君、山崎三男君、岡西謙三君、金井澄水君、大城朝詮君、和田守衛君、小林哲三君、鹽澤英一君、仲田惠令君、横山治人君、久保田吾良君、松本清太君、白井辰雄君、温井誠一君、若林遊龜尾君、關谷靜夫君、松島九平君、丸山久雄君、不免修六君、鹽川金次君、齋藤海藏君、藤卷壽一君、古畑金藏君、吉村金次郎君、長谷部眞一君、村松一清君、大服又衛君、坪倉藤三郎君、川合清行君、大嶋角藏君、古根是君、小池金三郎君、一之瀬袈裟壽君、岡戸廣治君、田中榮一君、仲俣伍市君、高柴眞次郎君、市岡新八君、萩原惠治君、市川潔君、倉澤建雄君、矢島駒二君、田中吟重君、下村博君、稻葉增吉君、古畑七三君、宮崎惠喜太君、代田文之助君、松澤莊太郎君、宇佐見

周紫君、前田正義君、小林桂一郎君、和田宗吉君、南勝右衛門君、小崎次郎君、坂田勘太郎君、吉川眞夫君、二木季人君、中村五郎君、宮澤嘉一君、關琴義君、瀨在實君、倉科浦二郎君、長谷部兵治君、志津(舊姓新田)忠次郎君、野知里慶助君、伊藤喜代君、家高甚一君、小羽根安治君、柏澤國治君、小瀧升太郎君、乙谷耕吉君、永井順君、南村末吉君、成瀬義郎君、柳澤得衛君、市川豐二君、新田穰君、米山修君、德武國久君、小池二郎君、林與五郎君、水上壯三君、中島要人君、藤田要吾君、由尾忠助君、千村万三君、千村重喜君、竹內房太郎君、丸山岩吉君、木村鐵治郎君、加藤朝太郎君、市岡淳一郎君、東原智君、岡田彌兵衛君、篠原爲一君、長谷川義雄君、遠藤宗作君、安藤晃君、兒野榮君、樋口智久君、新井彌藏君、河野長六君、酒井光義君、中田辰雄君、武久貞一君、塚田大君、島田雄太郎君、上田彌太郎君、林勘治君、梨原貞治君、山内藤一君、山下常記君、黑河內祐紀君、澤柳壽夫君、山梨縣蘇峽會御中、岡田籌君、鳴澤義男君、安江悅治郎君、古根勳君、藤原幾喜君、北川春君、原川只二君、原正造君、宮川昌平君、清水德久君、藏尾眞君、原治二君、伊深幾太郎君、小深安親君、内山伊那登君、山下不二三君、若園定良君(岐阜市武術道具商)、森巖君、戶田續君、中澤揚君、上田鉦二君、小林英二郎君、青木博夫君、

加藤源一郎君、西野入德君、拓植五郎君、千村忠次郎君、稻葉六之助君、池之端穰君、米山兼次君、橫井正守君、平田象藏君、宮下今朝次郎君、宮下孝美君、北村竹次郎君、加茂憲太郎君、下半通雄君、小田實君、中川源太君、伊藤芳郎君、畑卓二君、橫矢徹君、宮田久吉君、渡邊知則君、木村康明君、梶田實治君、白木老雄君、下技壽一君、原田義治君、大澤洋服店殿、伊東厚君、平田稻男君、新家教諭、細窪友一郎君、佐々木久一君、森正次君、小松精内君、坂本光太郎君、久務傳六君、伊藤正之助君、渡邊隆知君、上條芳郎君、古畑秋藏君、中村豐治君、尾重(舊姓木下)清君、古畑五郎兵衛君、中垣美一君、林省三君、赤羽高君、近藤幸吉君、島田勘四郎君、中畑佐料君、奥原吉右衛門君、原七郎君、田近善右衛門君、宮澤功君、角田久福君、安藤良三君、廣瀬靜之進君、宮入汎省君、山崎兵平君、樋口颯君、大澤邦夫君、豆山富藏君、千村政美君、秋山熊重君、脇田義正君、北川信美君、宮森太一郎君、都竹武次郎君、石坂季治君、西尾長一君、服部啓治郎君、水橋要作君、早川一雄君、塚本三樹君、本多清右衛門君、丸山嘉一郎君、曾我義郎君、山村次一君、山村克人君、岩田元吉君、梅村計介君、池野萬次郎君、熊谷清逸君、池田仲治君、長谷部久雄君、永田精一郎君、佐藤辰郎君、古畑今朝義君、高木本技君、下平佐門君、橫

川太市君、山下太郎君、宮城與市君、大森悅君、有賀正一君、三省堂器械標本株式會社御中、愛知縣立農林學校職員御中、上田高等女學校職員御中、長野縣松代農商學校職員御中、島津製作所東京支店御中、帝室林野管理局木曾支局奈良井出張所職員御中、同上松出張所職員御中、同王瀧出張所職員御中、皆川秀雄君、藤卷壽一君、竹内房太郎君、九子農商學校職員御中、更級郡立農學校職員御中、下高井郡立農林學校職員御中、富山縣立農學校職員御中、長野縣耕地整理係御中、長野新聞社活版石版部御中、田立村役場吏員御中、西筑摩稅務署員御中、西筑摩郡役所員御中、宮川永三君、縣立大町中學校職員御中、新瀨縣立加茂農林學校職員御中、中村國種君、藤技茂君

林友代領收報告

一金貳圓 原 四郎君  
 一金貳圓 柳澤邦信君

大正五年一月廿三日印刷  
 大正五年一月廿五日發行

編纂兼發行人 安井正夫  
 長野市西後町丙二十一番地

印 者 田中彌助  
 長野市西後町乙二十一番地

印 所 長野新聞社活版部  
 長野縣西筑摩郡島町二八九番地

發行所 蘆澤書店